

五百文字タイムトラベラー

多治見工業高校 P N 塩片 陸夫

物心ついた頃には自分が普通の人にはない能力を持っていることに気付いていた。俺は特定の時間だけ話を戻すことができる。その時間とは、五百文字である。

「最後の人ちゃんと電気消しとけよ。」

部活が終わり、監督が号令をかけた。俺はそそくさと鞆を背負い、部室を後にした。今日は俺の誕生日だ。毎年この日は親友の和宏が何かのサプライズを仕掛け、俺の家で待機している。早く帰らないと。

校門を出ると、カラスの大群が空を横切った。もう既に嫌な予感がする。あの和宏のことだ、今年もきつとクオリティの高いドッキリを企んでいるのだろう。去年はリアルな幽霊の仮装をして俺の帰りを待ち伏せていて、心臓が止まりかけた記憶がある。過激なのはやめてくれと怒りたかったが、俺を祝おうとしてくれていた純粋な気持ちと踏みにじりたくはなかったので、俺は何も言わないことにしている。毎年騙される俺も悪いだろうし。

俺は楽しみな気持ちと不安な気持ちを交えながら、早歩きで帰路を進んだ。誕生日の帰り道というだけでこんなにドキドキしているのは俺くらいだろう。全部和宏のせいだ。今年こそは優しめのドッキリにしてほしい所だが、あまり期待できるとは思えない。和宏は度が過ぎたお調子者だということを除けば普通に良い奴なんだけと。

そのときだった。ふと、自分のスマホを部室に忘れてきたことを思い出した。危ない危ない、このまま帰るところだった。急いで学校に戻らなければ。後ろを振り向くと、遠くにある校舎がとてもし小さく見えた。学校を出てから一キロは歩いただろう。今さら戻るの億劫だ。あの能力を使おう。五百文字前なら俺はまだ学校にいる。

——校門を出ると、カラスの大群が空を横切った。俺は部室に引き返し、スマホを鞆に入れて再び校門を出た。もう日が沈みかけていた空を見て、俺は小走りで帰路を進んだ。家まではそう遠くない。

「ただいま」

俺は声を上げながら家の玄関を開けたが、返事はなかった。誰もいないのだろうか。いや、兄の靴があるのでそんなはずはない。俺は不自然に荒らされている廊下を横目で見ながら、階段を上った。俺の部屋は兄と共同であり、二階の奥にある。

おそるおそる部屋のドアを開けると、思わぬ光景が目映った。そこには床に横たわる兄と、フードを深く被った見知らぬ男の姿があった。そいつの手には刃先が血に染まっているカッターが握られていた。ひと目で強盗だとわかった。

俺はとつさに能力を使おうとしたができなかった。俺の能力は最後に能力を使ってから五百文

字を過ぎないと使えないということを思い出した。強盗は俺を睨むとカッターを向けて追いかけてきた。俺は部屋を飛び出し、一目散に家を逃げ回った。文字数を超すまで捕まる訳にはいかない。数十秒ほど時間を稼いだ所で、いよいよ五百文字まで迫ってきた。強盗がカッターを振りかざす寸前、俺は能力を使うことができた。

——校門を出ると、カラスの大群が空を横切った。俺は全力で駆け出し、帰りを急いだ。一刻も早く帰らなければ兄の命が危ない。兄が強盗に襲われる前に助け出さなければ。先に警察だけ呼ぼうと思った俺はスマホを取り出そうとしたが、スマホは部屋に忘れてきたんだった。

「クソーこんなときに限ってー！」

俺はとにかく兄を救うことだけを考え、通学路を突っ走った。息を切らして家に辿り着くと、勢いよく玄関を開けた。周囲を見回し、家の中が荒らされているのを見て、既に強盗が家の中にいることを察した。奴はもう家にいる。そう思った俺は急に背筋が凍りついた。倒れている兄の姿が頭の中で再び蘇った。

俺は二階にいるはずの兄を大声で呼んだが、返事はなかった。俺は台所へ向かい、キッチンから包丁を取り出した。奴も刃物を持つていたので、武器を持たずに乗り込めばこちまで殺されかねない。俺は包丁を握りしめると階段を駆け上り、自分の部屋へと走った。

ドアを開けると、既に倒れている兄の姿があった。そしてすぐ横にはフードを被った男が立っていた。俺は反射的に持つていた包丁で強盗を刺した。二回、三回と胸部を目掛けて振りかざし、とにかく動かなくなるまで何度か刺しまくった。

目を開けると、床は真っ赤に染まっていた。すぐ傍には事切れた強盗が血にまみれて倒れていた。強盗をやっつけることには成功してみたんだ。

「大丈夫かー！しっかりしろー！」

俺はうつ伏せで横たわる兄の肩を揺さぶった。返事はないが、息はあるように見えた。致命傷は避けられているみたいだ。俺は救急車と警察を呼ぼうと一旦部屋を出た。階段の横にある固定電話から通報を終え、俺は再び部屋に戻った。次に俺は自分の目を疑った。血相を変えた兄が強盗の胸を両手で押さえていたのだ。

「おいタオル持ってこいー早くー！」

何が起きているのかわからなかった。倒れていたはずの兄が目の前で座っているのだ。

「え……兄ちゃん？何で？強盗に襲われたんじゃ……。」

しばらく放心状態でいると、兄は俺に向かって大声を上げた。

「ドッキリなんだよー！今日お前の誕生日だろー！わあっと驚かした後にサプライズするつもりだったんだー！何でお前包丁持つて上ってきたんだよー！何なんだよお前！」

フードを脱がされた強盗の顔をよく見ると、親友の和宏本人だった。取り返しのつかないことをしてしまったと気付いた俺は全身の血の気が引いた。いや、まだ間に合う。俺はすぐに五百文字前まで話を戻した。

——目を開けると、床は真っ赤に染まっていた。